

早稲田商学第 399 号
2 0 0 4 年 3 月

消 息

篠田義明先生のご定年退職にあたって

篠田義明先生がいよいよこの3月をもってご定年退職を迎えられます。1969年（昭和44年）に早稲田大学商学部専任講師となられてから今日に至るまで35年の永きにわたって商学部の英語教育を担っていらっしゃいました。その先生がお去りになることに大いなる寂しさを禁じえません。これから篠田先生が活躍なさり続けることは間違いのないことですが、この大きな区切りにあたり篠田先生ご足跡・ご功績そしてお人柄を振り返ってみたいと思います。

篠田先生は1933年（昭和8年）に千葉県君津郡小櫃村で生まれ、その地で幼年時代を過ごされました。1949年に木更津第一高等学校に入学しました。高校時代はバレーボール選手としてまた部長として活躍下さいました。スラリとした長身の容姿と病気をしない強壮な体、そして果敢なリーダーシップはこの時代に培われたものでありましょう。

1953年に篠田先生は早稲田大学教育学部英語英文学科に入学しました。大学へ入ってすぐ学んだビジネス・イングリッシュに強い感銘を受けた、本物の英語に出会ったと先生は述懐しておられます。このときの感銘が先生を実用英語の道に進ませたのでありましょう。また早稲田大学で中西秀男教授との出会ったことも先生の道を決めました。のちに科学技術英語の研究に進むことを篠田先生に勧めたのは中西教育学部教授でした。1957年丸善株式会社に入社。翻訳や輸出入の仕事に従事し、ビジネスや科学技術英文を読み書く力を着々と蓄積して行きました。1962年には勤務の傍ら明治大学大学院英文学科に入学しました。同年に先生は最初の著書である『工業英語実務便覧』を出版しました。29歳のときでした。1963年、ニューヨーク支店勤務を命じられた先生は中西教授に相談し、研究・教育の道に進む決心をして、丸善を退社下さいました。1965年に武蔵工業大学専任講師、翌年工学院大学に移られると同時に早稲田大学商学部の非常勤講師となられました、1969年に早稲田大学商学部の専任講師に就任し、以後現在まで商学部で教鞭をとり、商業英語・科学技術英語の研究と普及に邁進してこられました。

1970年代、篠田先生は工業技術英語に関する著作を次々とお出しになりました。主なものを挙げれば『工業技術英語の手引き』（日本経済新聞社 1971）、『工業英語』（朝日出版社 1972）、『工業英語の正しい訳し方』（南雲堂 1976）、『工業英語の語法』（研究社 1977）、『工業英語の実際』（日本経済新聞社 1978）などがあります。特に『工業英語の語法』は工業英語の文法・語法の特徴を包括的かつ体系的に論じた日本で最初のもので、大変優れた労作であります。

しかし、先生はこの頃すでに語法から文章レトリックへと視点を移しておりました。きっかけはミシガン大学で開かれた学会でした。そのとき受けた衝撃を 'astounded!' と表現しておられます。

In 1975 I traveled to Ann Arbor, Michigan, to attend a summer conference, "Teaching Technical and Professional Writing." The meeting was an eye opener. What I learned there literally changed my professional life. The teaching methods I saw demonstrated at the conference were completely different from those I had been applying in Japan. In my courses, I stressed English grammar and syntax to prepare my future scientists, engineers, managers, business people, and translators for their work. But the Michigan men — Professors Earl Britton, J. C. Mathes, Thomas Sawyer, and Dwight W. Stevenson spring to mind — focused on rhetoric to form their future professionals. I was astounded!

(pp. vi-vii, *Instructing Japanese Learners of english Technical and Scientific Writing: The Rhetorical Approach* Kenkyusha, 2003)

そして1978年には客員教授として1年間ミシガン大学でテクニカル・ライティングの研究に従事しました。

1980年代は篠田先生にとって文章レトリックを中心に据えたテクニカル・ライティングの指導法を確立していった時代でした。アメリカのテクニカル・ライティングの理論や方法をそのまま受け入れるのではなく、創意と工夫を生かしてまさに篠田式というべき独自の指導法を築いてゆかれました。1985年には、'Teaching English Technical Writing to Japanese Specialists' (*Transactions on Professional Communication*) という論文によ

り、優秀賞を授与されました。『テクニカル・イングリッシュ - 論理と展開』(南雲堂 1981), 『科学技術英文のレトリック』(南雲堂 1986。ミシガン大学の Mathes 教授, Stevenson 教授と共著。のちに改訂して『科学技術英語の実例と書き方』)などを出版するかたわら, 1982年には日本テクニカル・コミュニケーション協会を設立し, TEP (Technical English Proficiency) テストという科学技術英語の検定試験を開始しました。この検定試験は1984年からは早稲田大学の後援を得, 『早稲田大学-ミシガン大学 科学・工業英語検定試験』という名称となって現在に至っています。また, 1985年からは日本実用英語学会の会長として, 役に立つ英語の研究・教育・実践の先頭に立っております。

1990年代から2000年代は, 先生の努力が実を結び, 広く認められた時代といつてよいでしょう。1993年には先生の指導・教育を受けた人たちが中心となり, 先生の還暦を祝って記念論文集『実用英語の世界』(南雲堂)を刊行しました。1995年にはミシガン大学のあるミシガン州 Ann Arbor から, 日米において永年にわたってテクニカル・ライティングの指導普及に努めてきた功績に対して名誉市民の称号が送られました。

2002年には, 日本人学習者に対するテクニカル・ライティングの指導法に関する論文により早稲田大学から, 教育学博士の称号を授与されました。2003年にはこの論文をもとにした著書 *Instructing Japanese Learners of English Technical and Scientific Writing: The Rhetorical Approach* (Kenkyusha, 2003) が出版されました。篠田先生が永年研究なさり実践なさってきたテクニカル・ライティング理論の集大成と言ってよいでしょう。

これまで, 主に篠田先生の研究・業績を辿ってきましたが, 先生の商学部そして早稲田大学への貢献も大なるものがあります。永らく商学部英語教員の中核として商学部の英語教育に尽力してこられたばかりでなく, 1972年から1974年までは商学部学生担当教務副主任として, 当時の学園紛争の収拾にあたられました。また, 1987年からは *Business and Technical Communication* の演習を担当なさり, 多くの学生を指導なさってきました。さらに理工学部, 教育学部の大学院生を指導なさるばかりでなく, 早稲田大学エクステンションセンターにおいて, 学生のためのミシガン大学夏期セミナーを立案・実施し, 毎夏学生を引率してミシガン大学へ行くなど, 早大生の英語教育に熱意を傾けてこられました。その上に, 近年はビジネス・テクニカル・コミュニケーションに関するプロジェクト研究所を立ち上げ, 若い英語教員の育成とセミナーを通じての社会人・

学生の実用英語能力の向上に力を入れてきました。

これまでに出版された篠田先生の著書は60冊以上にのぼります。そして論文、雑誌への寄稿、講演等の業績は1,200点を越えます。これは、豊かなアイデアを生み出す頭脳と原稿の締め切りに遅れることなどない仕事の速さと几帳面さ、そしてたゆまず研究を続ける持続力の賜物でしょう。しかし先生は決して仕事一筋の堅い一方の方というわけではなく、人との付き合いも大事になさり、酔えば美声を披露するという気さくな方でもあります。篠田先生にはこれからも研究に指導に精力的に活躍なさって早稲田の名を高めていただく一方、これからも商学部のために手を貸していただきたいと存じます。

＊ 本稿は『篠田義明教授古希祈念論文集』（南雲堂 2004年3月刊行予定）の中の拙稿「篠田義明先生 70年の足跡」に加筆・変更を加えたものです。

篠田義明先生 主な著作と論文

『工業英語実務便覧』（共著） 産業図書 1962

「Anaphoric Noun とその用法」 『早稲田商学』 早稲田商学同攻会 1970

『工業技術英語の手引き』 日本経済新聞社 1971

『オーディオ方式工業技術英語入門』 研究社 1972

『工業英語』 朝日出版社 1972

『工業英語の正しい訳し方』 南雲堂 1976

『工業英語の語法』 研究社 1977

『工業英文説明書実例と書き方』 南雲堂 1977

『工業英語の実際』 日本経済新聞社 1978

'Pitfalls for Japanese Specialists in English Technical Writing' 『早稲田商学』 早稲田商学同攻会 1979

『恥じをかない英会話』 南雲堂 1979

'Pitfalls for Japanese Specialists in English Technical Writing' IEEE Transactions on Professional Communication 1981

『英語の落とし穴』 アサヒブニング社 1983

『コミュニケーション技術』 中央公論社 1984

- 『科学技術文のレトリック』(共著) 南雲堂 1987
- 『技術英語の常識』 ジャパンタイムズ社 1988
- 『書き方の技術』 ごま書房 1989
- 『実務英語の Q & A』 大修館書店 1992
- 『数・数式・図形・記号の英語表現』 日興企画 1993
- 『科学技術論文・報告書の書き方と英語表現』 日興企画 1994
- 'Frequent Errors in English Documents Written in Japan: Potential Legal Problems' 『早稲田商学』 360・361合併号 早稲田商学同攻会 1994
- 'Problem Areas for Japanese Technical and Business English Writers — A Methodology for Teaching Written Communication in Japan' 『企業経営の根底をなす英語コミュニケーション』 産研シリーズ No.28 早稲田大学産業経営研究所 1995
- 『グローバル・ビジネス英語教本』 南雲堂 1999
- 'English Affected by Social Changes — Birth of Cyberlanguage' 『早稲田商学』 第384号 早稲田商学同攻会 2000
- 『IT 時代のビジネス英語』 南雲堂 2001
- 'A Review of the Literature — Definition of English Technical and Scientific Writing —' 『早稲田商学』 第394号 早稲田商学同攻会 2002
- 'A Brief History of Technical and Scientific Writing' 『産業経営』 第33号 早稲田大学産業経営研究所 2002
- Instructing Japanese Learners of English Technical and Scientific Writing: The Rhetorical Approach* Kenkyusha Limited 2003
- 'Instructing Japanese Learners in the Rhetorical Approach to English Technical and Scientific Writing (Summary)' 『教育学研究科紀要』 No.13 早稲田大学教育学部大学院 2003

渡 辺 洋 一